《天地開闢以来帝王記》的「天神」
─與國生神話的關係─

李育娟

臺灣師範大學華語文教學系副教授

摘要

敦煌寫本的《天地開闢以来帝王記》是僅只一卷的小型書籍，收錄晉代時期的佛教傳說、帝紀、神話混雜在一起的民間俗說，以及事物的起源。舊稿曾提及這部書裡記載的伏羲・女媧創世神話與國生神話十分類似，但並未進一步深入調查兩者的關係。因為除了兩者近似，或是國生神話受到《天地開闢以来帝王紀》影響的結論之外，沒有辦法深入探討兩者的關係，因而未展開調查。

不過最近筆者以漢代壁畫和畫像石為線索，掌握了《天地開闢以来帝王記》和國生神話登場的「天神」的原型，無法深入探討的局面終於獲得新的進展。因此本論將以東亞神話・傳承為視角，以《天地開闢以来帝王記》的「天神」為中心考察國生神話「天神」的原型。

關鍵詞：伏羲、女媧、太一、天神、《天地開闢以来帝王記》

受理日期：2023 年 3 月 10 日

通過日期：2023 年 5 月 26 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202306_(40).0009

"Tianjin" in " Tenchikaipyakuiraiteiōki ": Relationship with the Myth of Kuni-umi

Li, Yu-Jiuan
Associate Professor, Department of Chinese as a Second Language,
National Taiwan Normal University

Abstract

The Dunhuang Manuscript "Tenchikaipyakuiraiteiōki" are small-scale books with only one volume, which contain folklore mixed with Buddhist legends, imperial records, and myths during the Southern and Northern Dynasties, as well as the origin of things. The old manuscript mentioned that the creation myth of Fuxi and Nuwa recorded in this book is very similar to the myth of Kuni-umi, but did not further investigate the relationship between the two. Because there is no way to explore the relationship between the two in depth, except for the conclusion that the national mythology was influenced by the "Tenchikaipyakuiraiteiōki", so no investigation was carried out.

However, using the murals and stone portraits of the Han Dynasty as clues recently, the author has grasped the prototype of the "Tianjin" that appeared in " Tenchikaipyakuiraiteiōki " and the myth of Kuni-umi, and finally made new progress in a situation that could not be explored in depth. Therefore, this thesis will take the perspective of East Asian mythology and inheritance, and focus on the "Tenjin" in "Tenchikaipyakuiraiteiōki" as the center to investigate the prototype of the myth of Kuni-umi "Tenjin".

Keywords: Fuxi, Nuwa, Taiyi, Tenjin, "Tenchikaipyakuiraiteiōki"

『天地開闢以来帝王紀』の「天神」
―国生み神話との関わり―

李育娟
臺灣師範大學華語文教學系准教授

要旨

敦煌写本の『天地開闢以来帝王記』は僅か一巻のみの書であるが、中国晋代の仏教伝説、帝紀、神話が混在した民間俗説や、物事の起源譚など貴重な内容を収めている。旧稿では、この書に描かれている伏羲・女媧の創世神話と日本の国生み神話との類似について提起したが、両者が近似していること、または『天地開闢以来帝王紀』に影響されたであろうという指摘のみにとどまり、深く探求できず、さらなる考察を進めなかった。

しかし、その後、漢代の壁画や画像石を手掛かりに、『天地開闢以来帝王紀』と国生み神話に登場した「天神」の原型を紐解くことができ、局面が打開された。そこで本論は東アジアの神話・伝承を視野に入れつつ、『天地開闢以来帝王紀』の「天神」を中心に、国生み神話の天神の原型を考究する。

キーワード：伏羲、女媧、太一、天神、『天地開闢以来帝王記』

『天地開闢以来帝王紀』の「天神」
―国生み神話との関わり―

李育娟
臺灣師範大學華語文教學系准教授

1. はじめに

敦煌写本の『天地開闢以来帝王記』(P4016、P2652、S505、S5785)は僅か一巻のみの書であるが、中国晋代の仏教伝説、帝紀、神話が混在した民間俗説や、物事の起源譚など貴重な内容を収めている。[1]旧稿では、この書に描かれている伏羲・女媧の創世神話と日本の国生み神話との類似について提起したが、[2]両者が近似していること、または『天地開闢以来帝王紀』に影響されたであろうという指摘のみにとどまり、深く探求できず、さらなる考察を進めなかった。

しかし、その後、漢代の壁画や画像石を手掛かりに、『天地開闢以来帝王紀』と国生み神話に登場した「天神」の原型を紐解くことができ、局面が打開された。そこで本論は東アジアの神話・伝承を視野に入れつつ、『天地開闢以来帝王紀』の「天神」を中心に、国生み神話の天神の原型を考究する。

筆者が旧稿で伏羲・女媧の創世神話と国生み神話の類似を提起した約三年後、占才成が国生み神話と『天地開闢以来帝王紀』を比較し、内容の近似が見られるゆえ影響関係がある可能性は高いと結論づけた。[3]そこで、本論は重複する文献の説明を必要最小限に留め、国生み神話と『天地開闢以来帝王紀』の近似点を説明した上で、重点を「天神」に転じて考察を行う。

---

[1] 郭鋒、1988 年、「敦煌写本『天地開闢以来帝王紀』成書年代諸問題」、『敦煌学輯刊』第 1、2 輯、蘭州大学歴史研究所、102～113 頁。郭鋒が成立年代を東晋十六国(317～420)に推定した。
[2] 拙稿、2013 年 3 月、「『注好選』と敦煌啓蒙書」、『国語国文』(882 号)第 82 巻第 3 号、京都、臨川書店、1～16 頁。
[3] 占才成、2016 年 3 月、「敦煌残巻『天地開辟以来帝王紀』と日本の国生み神話 : 柱めぐり神婚を中心に」東京、『東アジア文化研究』第 1 号、19～34 頁。

2. 国生み神話と『天地開闢以来帝王紀』の類似点

それでは、まず『天地開闢以来帝王紀』と、『古事記』『日本書紀』に見える国生み神話の類似点を確認する。

> 伏羲、女媧、因為父母而生、為遭水災、人民死盡、兄妹二人、依龍上天、得存其命。見天下荒亂、唯金崗天神、教言可行陰陽、遂相羞恥、即入崑崙山藏身、伏羲在左巡行、女媧在右巡行、契許相逢、則為夫婦、天遣和合、亦爾相知。伏羲用樹葉覆面、女媧用蘆花遮面、共為夫妻。今人交礼、戴昌粧花、因此而起。懐娠日月充滿、遂生一百二十子、各認一姓。六十子恭慈孝順、見今日天漢是也。六十子不孝義、走入藂野之中、羌故穴巴蜀是也。故曰：得続人位。其崑崙山、共天相連、名須弥山、蓋当天地之中正。[4]（『天地開闢以来帝王紀』）

洪水の禍で人類は絶滅したが、竜に乗り天界に到達した伏羲・女媧兄妹二人のみが生存した。荒廃した天下を見かねた金崗天神は、二人に結婚せよと命ずる。二人は互いに恥じらって、崑崙山に入り身を隠したが、伏羲が左から崑崙山を廻り、女媧が右から崑崙山を廻って出会えたら夫婦になろうと誓った。そして逢着した二人は夫婦となり、百二十人の子供を産んだ。

これに対応する『古事記』『日本書紀』の国生み神話は、次のように記されている。

> 於是、天神諸命以、詔二伊耶那岐命・伊耶那美命二柱神一、修二理固二成是多陀那用弊流之國一、賜二天沼矛一而、言依賜也。(中略)
> 於二其島一天降坐而、見二立天之御柱一、見二立八尋殿一。（中略）
> 伊耶那岐命詔、然者、吾与汝、行二廻逢是天之御柱一而、為二美斗

[4] 法国国家図書館編、1995 年、『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』、上海、上海古籍出版社、350～351 頁。

能麻具波比一。如此之期、乃詔、汝者、自レ右廻逢。我者、自レ左廻逢。(中略)於是、二柱神議云、今吾所レ生之子、不レ良。猶宜レ白二天神之御所一、即共參上、請二天神之命一。爾、天神之命以、布斗麻邇爾上ト相而詔之、因二女先言一而、不レ良。亦、還降改言。故爾、返降、更往二廻其天之御柱一、如レ先。(『古事記』)[5]

一書曰、天神謂二伊奘諾尊・伊奘冉尊一曰、有二豊葦原千五百秋瑞穂之地一。宜二汝往脩一之、廼賜二天瓊戈一。(中略)二神降二居彼嶋一、化二作八尋之殿一。又化二竪天柱一。(中略)即将レ巡二天柱一、約束曰、妹自レ左巡、吾當二右巡一。(中略)故還復上二詣於天一、具奏二其狀一。時天神以二太占一而卜合之、乃教曰、婦人之辞、其已先揚乎。宜二更還去一、乃卜二定時日一而降之。故二神改復巡レ柱。陽神自レ左、陰神自レ右。(『日本書紀』)[6]

『古事記』では、「天神」がイザナキ・イザナミに、漂っている国を整え固めよと命じている。天神が主導して命令を下す点が『天地開闢以来帝王紀』と類似する。『日本書紀』の場合、本文ではなく「一書」において同様に天神が命令を下す文が見られる。次に類似している点は、天柱を廻る儀式である。崑崙山が天柱、つまり地と天を繋ぐ柱であることは『神異経』、『竜魚河図』や『山海経図讃』、『呉越春秋』などに記されている。伏羲が左、女媧が右から天柱である崑崙山を廻って、出会った二人は婚姻を結んで夫婦となった。

『神異経』曰、崑崙有銅柱焉、其高入天、所謂天柱也。圍三千里、圓周如削。(『芸文類聚』巻七)[7]

---

[5] 太安万侶撰、山口由紀・神野志隆光校注、『古事記』(新編日本古典文学全集一)、東京、小学館、1997 年、30～34 頁。
[6] 舎人親王撰、小島憲之・直木孝郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注、『日本書紀』(新編日本古典文学全集二)、東京、小学館、1994 年、28～30 頁。
[7] 歐陽詢(唐)、『芸文類聚』、北京、中華書局、1965 年、130 頁。

『竜魚河図』曰、崑崙山、天中柱也。(『芸文類聚』巻七）[8]

昆侖月精、水之霊府。惟帝下都、西老之宇。嵥然中峙、号曰天柱。（『山海経図讃』巻一）[9]

寡人聞崑崙之山、乃地之柱、上承皇天、氣吐宇内、下処后土、稟受無外。(『呉越春秋』巻八、「勾踐帰国外伝」)[10]

『古事記』ではイザナキが左から、イザナミが右から天柱を廻り、伏羲・女媧と同じ方向で天柱を廻る。『日本書紀』の「一書」では、イザナキが右から、イザナミが左から廻ったがうまくいかず、二回目の天柱廻りは、イザナキが左から、イザナミが右から廻り直すことにした。『淮南子』「北斗之神有雌雄、十一月始建於子、月從一辰、雄左行、雌右行」（巻三「天文訓」）[11]、とあるように、「男左女右」という廻りの順次は、実は古代中国人が認識した天象を反映したものである。

3. 天神をめぐる諸説

次は、国生み神話に登場した天神をめぐる諸説に目を向ける。国生み神話に関する研究は多いが、本格的に「天神」をテーマに取り上げた論考は松村武雄に限られる。そこで、以下まず松村武雄の説を確認し、その後『古事記』、『日本書紀』の各注釈に着目し、天神をめぐる諸説を跡付ける。

松村武雄は「天神の命を挙示するのは、『古事記』であり、而してこれに呼応するものとして唯一個の「一書曰」があるに対し、天神の命の説述を示さないのは、『日本書紀』本文とその「一書曰」の三

---

[8] 『芸文類聚』、注 7 に同じ、130 頁。
[9] 郭璞（晋）、『山海経図讃』（叢書集成初編）、北京、中華書局、1991 年、27 頁。
[10] 趙曄（漢）、『呉越春秋』、山東、斉魯書社、2000 年、74 頁。
[11] 劉安（漢）撰、高誘（漢）注、『淮南子』、上海、上海古籍出版社、1989 年、37 頁。

個とに通じている。かくしてこれ等二様の伝承のうち、そのいずれがより原初的なものであろうか」という問題を提起した。[12]

> 天神の詔命が諾冉二神による国生みと矛盾してゐる。矛盾しないまでも、頗る不調和であるといふことである。記に従へば、天神は諾冉二神に対して、「この漂へる国をつくり固めなせ。」と詔命し給うたとあり、紀の「一書曰」に従へば、「豊葦原千五百秋瑞穂の地有り、宜しく汝往いて循すべし。」と詔うたとある。然るに二神の降下し給うたところは、茫々たる滄溟であつて、更に国土らしいものは存在しない。そこには往いて循すべき「豊葦原千五百秋の瑞穂の地」は、未だ見出されない。かくして天神の詔命は明かに一の矛盾言であり、「この漂へる国をつくり固めなせ。」にしても、全く矛盾してゐるのではないとしても、頗る事の実情に調和してゐない。(松村武雄『日本神話の研究』)

松村武雄は天神詔命の叙事に矛盾があることをはじめいくつかの疑問点を提起し、沖縄の創世神話と比較させた。その結論として、「神話的にすら現実性を有しない、非特定的にして shadowy な存在態をば、事の行きがかりの上から、また所謂ミコトモチの観念・信仰の上から、ただ漠然機械的に引っぱり出して、これに発せしめた詔命。」と説明、また別の角度から、「天神と諾冉二神との間の指令関係は本源的なものではなくて、第二次的な発想である。」と結論づけた。次は、角林文雄の注釈を見てみよう。

> この一書では天神がイザナキ・イザナミに命令する。『古事記』も同様である。古来、学者はこの天神の解釈に困っている(『釈日本紀』七七)。一応は最初に生まれ出た五柱の神々を指すとする。論理的にはその他に考えられないが、これらの神々は

[12] 松村武雄、1955 年、「第三章国生み神話」、『日本神話の研究』東京、培風館、173 頁、176 頁、180 頁、183 頁。

「独り神」で『古事記』の場合など「身を隠したまひき」とされている。身をかくした神々が命令するのはおかしいし、五柱（あるいは七柱）の「独り神」が集団となって命令するのもおかしい。それでこのような指令関係は本源的ではなく、二次的な発想と考える説がある（松村二・一八三）。それは合理的であるが、それではイザナキ・イザナミに誤りを認識させ、正させたのは誰か、という疑問が生じる。特定の神ではなく、天の意思を具体化するような神格が初期の神話において既にあったものとすべきであろう。（角林文雄『『日本書紀』神代巻全注釈』）[13]

角林文雄は松村武雄の説を合理的だと評したが、誰がイザナキ・イザナミの誤りを正したのかという疑問を呈した。そして、「特定の神ではなく、天の意思を具体化するような神格が初期の神話において既にあったものとすべきであろう」と説明した。次に、西郷信綱の注釈では、天神が「タカミムスヒ」であると説明した。

理屈からすれば、この「天つ神」は、初段に見えた五柱の別天神をさすことになる。これにたいし、いわゆる造化三神をさすとの見かたも成りたたなくはない。しかし何れにせよ、この天つ神の主座を占めるのがタカミムスヒであることは、のちに、この神と天照大神とが高天の原を代表する神として並称されているのを以て知りうる。（西郷信綱、『古事記注釈』）[14]

そして、新編日本古典文学全集『古事記』の頭注では「高天原にあらわれた神全体を指す。どの神と具体的にささず、高天原からの働きによって伊邪那岐神・伊邪那美神の国作りが始まったことを示

[13] 角林文雄、1999年、『『日本書紀』神代巻全注釈』、東京、塙書房、98頁。
[14] 西郷信綱、1975年、『古事記注釈』第1巻、東京、平凡社、100頁。

す。」[15]と注する。日本古典文学大系『日本書紀』の頭注では、「天神はここでは高天原にいる神の意。」[16]と注し、新編日本古典文学全集『古事記』の注と同じである。このように神全体を指すという同じ注釈がみられるものの、「第二次的な発想」、「天の意思を具体化するような神格」、「タカミムスヒ」などの解釈もあり、全体からみれば「天神」に対する説明が分かれている。

具体的な神名を挙げず、概略的な「天神」に切り替えたという唐突さから、松村武雄や諸本の注釈などは、様々な角度から説明を施している。しかし、国生み神話は『天地開闢以来帝王紀』の内容と類似点があることから、『天地開闢以来帝王紀』の「金崗天神」という「天神」の存在に影響されている可能性がより高いと考えられる。「金崗天神」が主導的に伏羲・女媧の婚姻に介入するように、国生み神話において、どの神かに拘らず、とにかくイザナキ・イザナミに命令する「天神」が必要とされた。先述したように、松村武雄はこの天神の詔命を矛盾、不調和と説明、「ただ漠然機械的に引っぱり出して、これに発せしめた詔命」、または、「本源的なものではなくて、第二次的な発想である。」と解釈した。こうした解釈が施されたのは、おそらく『天地開闢以来帝王紀』の介在で天神の詔命を入れたあげく、叙事に破綻を招いたことが原因であろう。

『天地開闢以来帝王紀』の影響は可能性の一つとして考えられるが、実はもう一つの可能性が潜んでいる。郭鋒は『天地開闢以来帝王紀』の特徴を次のように述べた。

> 『天地開闢以来帝王紀』は仏教と在来の伝承が融合したもので、その融合した説を天地創造の解釈に用いた。これは同類の書にない特徴であり、晋隋の代、仏教が日に日に漢文化に浸透した

---

[15]『古事記』注 5 に同じ。30 頁。
[16] 舎人親王撰、坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注、『日本書紀』（日本古典文学大系）岩波書店、1967 年、82～83 頁。なお、新日本古典文学大系では「天神」の語に注釈なし。

証しである。[17]

例えば、前掲した伏羲・女媧の段の最後、「其崑崙山、共天相連、名須弥山、蓋當天地之中正。」(『天地開闢以来帝王紀』)、須弥山と崑崙山を同一視する描写は、仏教と在来の伝承が融合した一つの例である。『天地開闢以来帝王紀』が仏教と在来の伝承が融合したものであるということは、伏羲・女媧の創世伝承には母胎となった在来の伝承があったはずである。つまり、国生み神話は、『天地開闢以来帝王紀』ではなく、その在来の伝承に影響された可能性も十分あると考えられる。

ここでは、『天地開闢以来帝王紀』の「金崗天神」という天神について考えてみよう。伏羲・女媧を凌ぐ存在であることはわかるが、神名からはどの神であるか見当がつかない。『天地開闢以来帝王紀』は仏教と在来の伝承が融合した作品であるため、一つ考えられるのは、「金崗天神」は「金剛天神」の誤写だという可能性である。『天地開闢以来帝王紀』における誤写の例をあげると、伏羲・女媧には「依龍上天」と「衣龍上天」の二つの異なった表記があるが、どちらか一つが誤写であろう。『天地開闢以来帝王紀』では、長きにわたる抄録の繰り返しにより誤写が生じた状況が確認できる。ただし、「金崗天神」は「金剛天神」の誤写だとしても、「金剛天神」という神名は存在しない。これは、おそらく『天地開闢以来帝王紀』の作者が、在来の「某天神」と伏羲・女媧の創世神話を仏教色に染め上げたゆえではないかと推察する。

4. 太一と伏羲・女媧

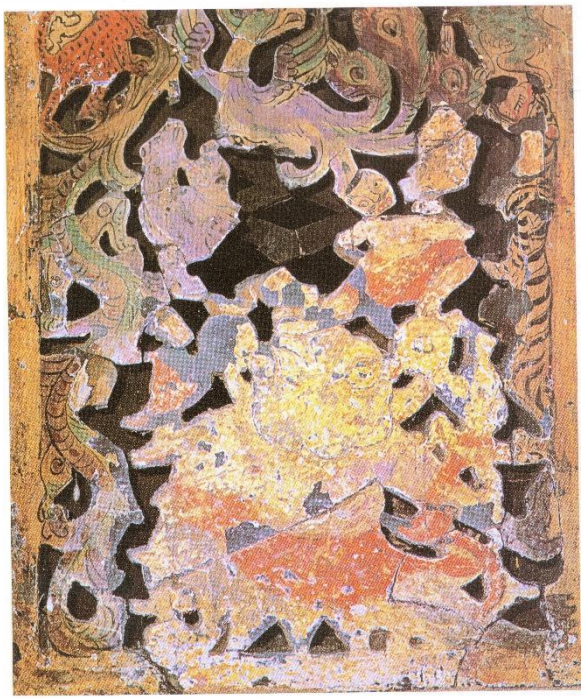
実は、その在来の「某天神」は「太一」ではないかと私は考える。「太一」が『天地開闢以来帝王紀』にみられる「金崗天神」の原型であるとできる手掛かりは、本節に掲げる漢代の壁画や画像石にあ

[17] 郭鋒、1988 年、「敦煌写本『天地開闢以来帝王紀』成書年代諸問題」、『敦煌学輯刊』第 1、2 輯、蘭州、蘭州大学歴史研究所、106 頁。

る。

（図１）、洛陽焼溝 61 号漢墓壁画[18]

壁画に脱色があるため、画像に関する一部の説明は、龐政の論攷を参照した。[19]半人半獣の巨人は上半身が裸で、赤い腰布を纏い、両側に下半身が竜形または蛇形の伏羲・女媧が立っている。伏羲・女媧がもつ円盤は日と月である。



（図２）、河南偃師邙山壁画磚: [20]

巨大な獣人は、上半身が裸で、赤い半ズボンを身に着け、両腕に下半身が竜形または蛇形の伏羲・女媧を抱く。伏羲・女媧が手で日月を掲げる。

---

[18] 中国墓室壁畫全集編集委員會、2011 年、『中国墓室壁畫全集 1 漢魏晉南北朝』、河北、河北教育出版社、図 20、16 頁。

[19] 龐政、2020 年 1 月、「漢代太一手擁伏羲・女媧図像及相関問題」、四川、『南方文物』、79 頁。

[20] 曹健強、2009 年、「洛陽新発現一組漢代壁画磚」、北京、『文博』第 4 期、15 頁。

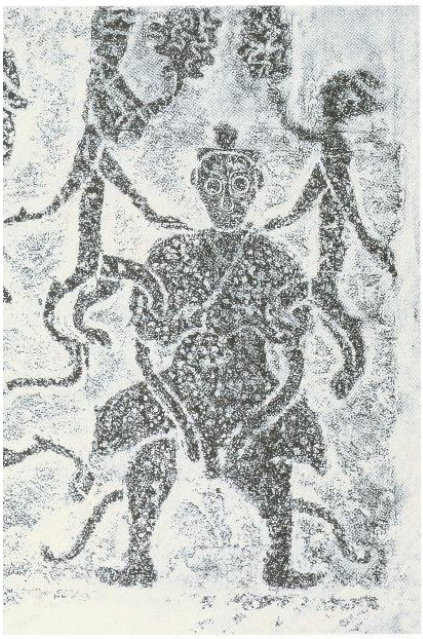
（図３）、洛陽偃師縣新莽墓壁畫:[21]

顔のみで現れる獣人は、その両側に日月を掲げる伏羲・女媧がいる。伏羲・女媧の下半身は竜形または蛇形である。

（図４）、河南南陽唐河針織廠漢墓画像:[22]

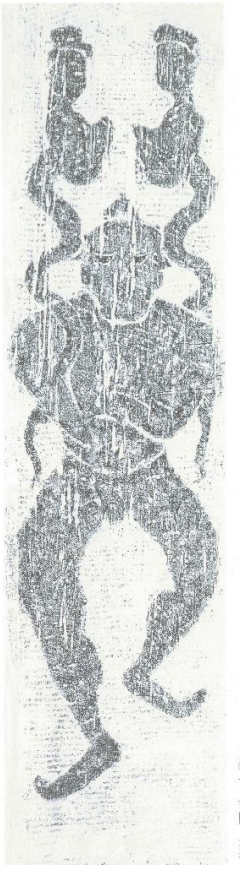
巨人は、下半身が竜形または蛇形の伏羲・女媧を抱く。

[21] 中国墓室壁畫全集編集委員會、2011年、『中国墓室壁畫全集一漢魏晉南北朝』、河北、河北教育出版社、図43、35頁。
[22] 中国画像石全集編輯委員會、2000年、『中国画像石全集六河南漢画像石』、山東、山東美術出版社、図16、13頁。



（図５）、河南魏公橋漢墓画像: [23]

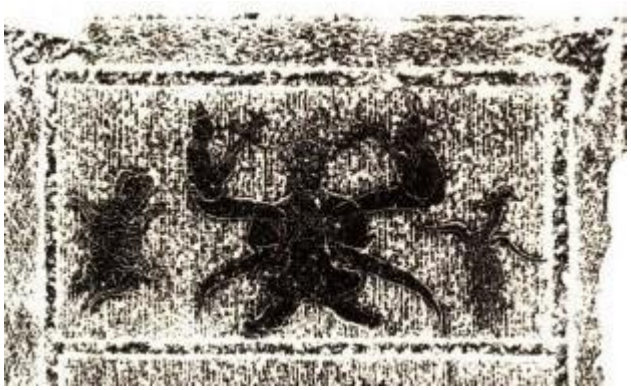
巨人は、下半身が竜形または蛇形の伏羲・女媧を抱く。



[23] 『中国画像石全集六河南漢画像石』、注 22 に同じ。図 207、170 頁。

（図６）、皇聖卿東闕南面画像：[24]

巨人は、下半身が竜形または蛇形の伏羲・女媧を抱く。



（図７）、 山東嘉祥紙坊鎮敬老院（一）：[25]

巨人は三峰形の冠をかぶり、下半身が竜形または蛇形の伏羲・女媧を抱く。伏羲・女媧が規（コンパス）と距（曲尺）をもつ。

[24] 中国画像石全集編輯委員會、2000 年、『中国画像石全集一山東漢画像石』、山東、山東美術出版社、図 8、4 頁。

[25] 中国画像石全集編輯委員會、2000 年、『中国画像石全集二山東漢画像石』、山東、山東美術出版社、図 115、107 頁。

（図８）.山東嘉祥紙坊鎮敬老院（二）：[26]

巨人は三峰形の冠をかぶり、下半身が竜形または蛇形の伏羲・女媧を抱く。伏羲・女媧が規（コンパス）と距（曲尺）をもつ。図８は図７に近似する。

独神であった伏羲と女媧は、漢代から神格が落ち人類の始祖神とされたため、対となった伏羲・女媧の画像が多くみられるようになった。『魯靈光殿賦』「伏羲鱗身、女媧蛇軀」（『文選』）[27]が示すように、壁画、画像石、絹絵などでは、伏羲・女媧は下半身が竜形もしくは蛇形で描かれている。そのうち一部の画像石や壁画では、半人半獣や巨人の形態をもつ神が二人の間に立つ図像と、神が両腕で伏羲・女媧を抱く図像がある。このような図像は、河南・山東・安徽に計十三個散在している。[28]　従来、その神は太一、盤古、高禖神、炎帝、方相氏などに擬されてきた。しかし、近年まわりに伏羲・女媧、または日、月、四象（青竜・朱雀・白虎・玄武）などが存在することを根拠に、太一である説が支持されるようになった。[29]

---

[26] 『中国画像石全集二山東漢画像石』、注 25 に同じ。図 124、116 頁。
[27] 蕭統（南朝梁）編、『文選』、巻第 11、北京、中華書局、1986 年、515 頁。
[28] 龐政、2020 年 1 月、「漢代太一手擁伏羲・女媧図像及相関問題」、注 19 に同じ。78 頁。
[29] 顧穎、2016 年 11 月、「漢代天文觀念與漢畫像“太一” 圖示」、江蘇、『江蘇師範大學學報』、第 42 卷第 6 期、141 頁。

漢代から伏羲・女媧が人類の始祖神とされたことで、画像石や壁画に太一が両腕で伏羲・女媧を抱く構図は、太一が陰陽を司り、二人の婚姻を媒介するという意味合いが含まれるようになった。これらの図像は、『天地開闢以来帝王紀』の「金崗天神」が伏羲・女媧に夫婦になれと命ずる内容と合致している。太一はおそらく「金崗天神」の原型であり、在来の「某天神」であろうと捉えられる。

太一は多種多様な特徴をもっている。劉屹によると、これは太一が長い年月の間に次第に進化し、また地方と中央の異なった認識によって形成されたものであるがゆえである。太一は先秦では哲学の概念、地方的神祇であり、漢代では北極星神、天帝であるなど多くの特性をもち、簡単に一つに絞ることができない。[30]

中宮天極星、其一明者、太一常居也。(『史記』巻二七「天官書」)[31]

太乙者、北辰之神名也。居其所曰太乙、常行於八卦日辰之間、曰天乙或曰太一（漢・鄭玄注『易緯乾鑿度』)。[32]

『春秋合誠図』曰、天皇大帝、北辰星也。含元秉陽、舒精吐光、居紫宮中、制御四方、冠有五彩。」(『太平御覧』巻六八四）[33]

画像石と同時代の漢代史料に着目すると、『史記』「天官書」及び鄭玄注『易緯乾鑿度』、『春秋合誠図』では、太一が北極星でありながら、天帝までに神格が高められたと記されている。漢代の壁画、画像石で、巨人または半人半獣などの不思議な姿をもつ存在として描かれている太一は、当時の人々にとって北極星、天帝であるのみならず、人類始祖の伏羲・女媧の婚姻を媒介した重要な人物である

[30] 劉屹、2011 年、『神格與地域　漢唐間道教信仰世界研究』、上海、上海人民出版社、25～26 頁。
[31] 司馬遷（漢)、『史記』、北京、中華書局、1997 年、1289 頁。
[32] 鄭玄（漢）注、『易緯乾鑿度』、台北、芸文出版社、1969 年、2～3 頁。
[33] 李昉（宋)、『太平御覧』、台北、新興書局、1959 年、3018 頁。

と認識されていた。また、劉屹によると、

> 漢武帝が太一を郊祀したことで、太一の宇宙の創造者、最高神としての地位が確立されている。漢代の図像資料によれば、太一は陰陽を司り、伏羲、女媧を凌ぐ至高の地位をもっている。漢代とその以後の時代、庶民が信仰する太一の図像には、中央に太一がおり、伏羲・女媧がそばに立ち、または太一が二臂で伏羲、女媧を抱く、という特徴が見られる。中央に立つ太一が獣の顔をしている例もあるが、大半は人間化されている。[34]

漢武帝の郊祀により、太一は宇宙の創造者、最高神の地位を獲得している。林巳奈夫の指摘によると、「最高神とそれを挟んで表はされる日月、といふ表現型式は、漢から六朝時代に行はれた図像表現に普遍的なものであつた」[35]。前掲した漢代壁画の図一、図二、図三には、伏羲・女媧が日と月を掲げた姿勢で太一の両側に立つ構図がみられる。その中央に位置する太一は、まさに日・月にかこまれる最高神の具現である。

そして、太一と「天神」二字の用例を窺えば、

> 天神貴者太一、太一佐曰五帝。(『史記』巻二八「封禅書」)[36]

> 泰一、天帝之別名也。劉伯莊云:「泰一、天神之最尊貴者也。」(『史記正義』)[37]

『史記』「封禅書」、『史記正義』には、天界において太一は最も尊貴な天神であると記されている。『天地開闢以来帝王紀』の「天神」の二字は、おそらく仏教的な色彩に染められる前の伝承にあったと

---

[34] 劉屹、『神格與地域　漢唐間道教信仰世界研究』、注 30 に同じ。22～23 頁。
[35] 林巳奈夫、1989 年、『漢代の神神』、京都、臨川書店、251 頁。
[36] 司馬遷（漢）、『史記』、注 31 に同じ。1386 頁。
[37] 司馬遷（漢）撰、張守節（唐）正義、『史記』、注 31 に同じ。1289 頁。

考えられる。さきも述べたが、『天地開闢以来帝王紀』の母胎である文献に、既に在来の伏羲・女媧と、「某天神」の伝承が描かれている。この天神の正体は前掲した漢代画像石、壁画の図像から、やはり太一に他ならないであろう。つまり、『天地開闢以来帝王紀』の母胎となった在来の伝承における伏羲・女媧の婚姻を媒介する天神は、太一であると推定できる。最高神である天帝は、人類の絶滅を危惧し、伏羲・女媧に夫婦になるよう命令するという、身分相応の行動をとったと言えよう。そして、伏羲・女媧・太一の画像石は、あたかも『天地開闢以来帝王紀』の創世神話を語っているようなものと把握できる。

つまり、天帝である太一天神が、伏羲・女媧に夫婦になれと命令したという在来の創世神話があり、『天地開闢以来帝王紀』はそれをアレンジして、仏教と在来の神話を融合させた。元である太一天神と伏羲・女媧の伝承が散逸し、残された画像石がその伝承の面影となっている。

5. おわりに

国生み神話において、神名を明かさず天神との概略で称するのは、『天地開闢以来帝王紀』の「金崗天神」の影響をそのまま受けた可能性があるからであろう。一方、『天地開闢以来帝王紀』の母胎であった在来の伝承を拠りどころとした可能性も十分考えられる。前者は間接的な影響、後者は直接的な影響となる。つまり、漢代から最高神となった太一と、伏羲・女媧の伝承は、直接的または間接的に国生み神話に影響を与えていると推定できる。

崑崙山の上空に人類の存続を危惧する太一天神が必要であり、主導的に伏羲・女媧に命令を下さねば創世の伝承が始まらない。国生み神話はそれに影響されて天神を登場させたが、不調和をもたらした。これは、松村武雄の「ただ漠然機械的に引っぱり出して」、また、「本原的なものではなくて、第二次的な発想である。」という説明にも通じているであろう。

東アジアの神話、伝承においては、太一天神が国生み神話の天神の現れを促す土壌であったと捉えられよう。

参考文献

太安万侶撰、山口由紀・神野志隆光校注、『古事記』（新編日本古典文学全集一）、東京、小学館、1997 年、30～34 頁。

角林文雄、1999 年、『『日本書紀』神代巻全注釈』、東京、塙書房、98 頁。

西郷信綱、1975 年、『古事記注釈』第一巻、東京、平凡社、100 頁。

拙稿、2013 年 3 月、「『注好選』と敦煌啓蒙書」、『国語国文』（882 号）第 82 巻第 3 号、京都、臨川書店、1～16 頁。

占才成、2016 年 3 月、「敦煌残巻『天地開辟以来帝王紀』と日本の国生み神話 ：柱めぐり神婚を中心に」東京、『東アジア文化研究』第 1 号、19～34 頁。

舎人親王撰、小島憲之・直木孝郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注、『日本書紀』（新編日本古典文学全集二）、東京、小学館、1994 年、28～30 頁。

舎人親王撰、坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注、『日本書紀』（日本古典大系）東京、岩波書店、1967 年、82～83 頁。

林巳奈夫、1989 年、『漢代の神神』、京都、臨川書店、251 頁。

松村武雄、1955 年、「第三章国生み神話」、『日本神話の研究』東京、培風館、173 頁、176 頁、180 頁、183 頁。

中国墓室壁畫全集編集委員會、2011 年、『中国墓室壁畫全集一漢魏晋南北朝』、河北、河北教育出版社、図 20、16 頁。図 43、35 頁。

中国画像石全集編輯委員會、2000 年、『中国画像石全集六河南漢画像石』、山東、山東美術出版社、図 16、13 頁。図 207、170 頁。

中国画像石全集編輯委員會、2000 年、『中国画像石全集一山東漢画像石』、山東、山東美術出版社、図 8、4 頁。

中国画像石全集編輯委員會、2000 年、『中国画像石全集二山東漢画

像石』、山東、山東美術出版社、図 115、107 頁。図 124、116 頁。
司馬遷(漢)、『史記』、北京、中華書局、1997 年、1289 頁。1386 頁。
法国国家図書館編、1995 年、『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』、上海、上海古籍出版社、350～351 頁。
李昉(宋)、『太平御覧』、台北、新興書局、1959 年、3018 頁。
郭鋒、1988 年、「敦煌写本『天地開闢以来帝王紀』成書年代諸問題」、『敦煌学輯刊』第 1、2 輯、蘭州、蘭州大学歴史研究所、102～113 頁。
郭璞(晋)、『山海経図讃』(叢書集成初編)、北京、中華書局、1991 年、27 頁。
曹健強、2009 年、「洛陽新発現一組漢代壁画磚」、北京、『文博』第 4 期、12～16 頁。
趙曄(漢)、『呉越春秋』、山東、斉魯書社、2000 年、74 頁。
鄭玄(漢)注、『易緯乾鑿度』、台北、芸文出版社、1969 年、2～3 頁。
劉安(漢)撰、高誘(漢)注、『淮南子』、上海、上海古籍出版社、1989 年、37 頁。
劉屹、2011 年、『神格與地域　漢唐間道教信仰世界研究』、上海、上海人民出版社、22～23 頁。25～26 頁。
歐陽詢(唐)、『芸文類聚』、北京、中華書局、1965 年、130 頁。
蕭統(南朝梁)編、『文選』、巻第 11、北京、中華書局、1986 年、515 頁。
龐政、2020 年 1 月、「漢代太一手擁伏羲・女媧図像及相関問題」、四川、『南方文物』、78～88 頁。
顧穎、2016 年 11 月、「漢代天文觀念與漢畫像“太一” 図示」、江蘇、『江蘇師範大學學報』、第 42 巻第 6 期、137～142 頁。